



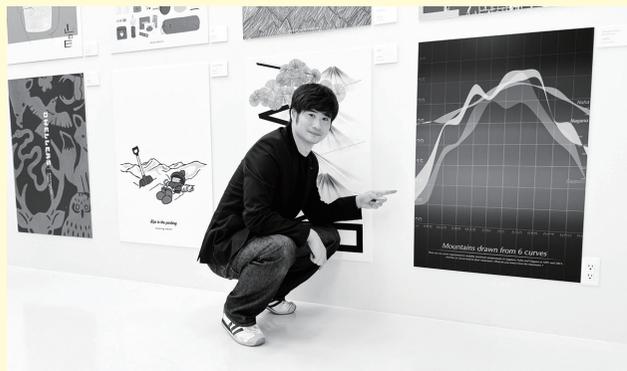
●2024年の締め括り

気がついたら来週は2025年になるということで、今年最後の研究会通信原稿となります。みなさまにとっての2024年はいかがでしたでしょうか。自身は、慶應義塾大学大学院メディアデザイン研究科での内地研究(新しい書道体験のデザイン)、初めてのポスター展出展(JAGDA)、日本デザイン学会会長賞受賞、カラーデザインに関する講演2件、2件のデザインコンペ審査に携わったことなどこれまでになく有意義な1年になりました。

色彩教材研究会の主査として残り3ヶ月、未来につながるようにギャラリートークの準備を進めたいと思います。

今年1年、お世話になりました。ありがとうございました。

みなさま、佳いお年をお迎え下さいませ。



(吉澤陽介 主査より：023)

源氏物語の色-55「手習(てならい)」

薫、二十七歳の年の三月末頃のこと。比叡山延暦寺三塔のひとつ横川(よかわ)の僧都(そうず)の母尼と妹尼らとの一行が初瀬(はせ)詣でをした帰途、宇治で正気を失って倒れている若い女性を助け、比叡山麓、小野の里の山荘へ連れ帰り介抱を続けた。

この女性が入水して死んだとされた浮舟であった。浮舟は、快復した後、強く懇願して、出家を遂げてしまう。

翌年、浮舟の一周忌の法要のお供えとして薫へ納める女装束の調製を依頼された妹尼が材料を染める準備などしている様子を見て、不思議なめぐり合わせを感じる浮舟であったが、自身がその人であるとは言いだせない。

女房の一人にその手伝いを依頼された時には、悲しくなり、気分が悪いと言って横になってしまう。紅の単衣の生地の上に、桜色の織物を重ねて見せ、「姫君にはこの様なものをお召しいただきたいのに、墨染めのお姿で残念だ」といったことを言う女房も居た。

浮舟の尼衣の無彩色と、お供えのための装束の華やかな彩りが対照的に描かれている。一方、薫は浮舟の一周忌の法要を営んだのち、浮舟らしき女の話の伝え聞き、それを確かめようと決意する。

(平山和香子)

●大辞泉ひろいよみ 75一け・こ

玄石：げんせき。磁石のこと。

玄鳥：げんちょう。ツバメのこと。



こいねず：濃い鼠。濃いねずみ色。

濃い蒔梨子地：こいまきなしじ。金銀粉を濃くまいた梨子地。

こう：紅。くれない。くれない色。べに色。

香：織り色の名。縦糸は赤、横糸は黄。または縦糸・横糸ともに香色の織物。老人が着用。襲の色目の名。表は香色、裏は紅。

黄埃：こうあい。黄色い土ぼこり。黄塵。

黄緯：こうい。黄道座標における緯度。黄道を零度として、南北に九十度まで測る。

紅一点：こういってん。多くのもののなかで、ただ一つ異彩を放つもの。多くの男性の中にただ一人いる女性。

香色：こういろ。香染めの色。黄色みを帯びた薄赤色。

紅雨：こうう。春、花に降りそそぐ雨。赤い花の散るようすを雨にたとえていう語。

香雲：こううん。立ちのぼって雲のように見える香の煙。桜の花などが一面に咲いているようすを雲に見立てていう語。

黄雲：黄色の雲。黄金色の雲。稲が実り水田一面に見えるのを雲にたとえた語。(永田泰弘)